

お月さまいくつ

北原白秋

青空文庫

お月つきさまいくつ。

十三じふさん七ななつ。

まだ年としや若わかいな。

あの子こを産うんで、

この子こを産うんで、

だあれに抱だかしよ。

お方まんに抱だかしよ。

お方まんは何ど処こへ往いた。

油あぶ買かひに茶ち買かひに。

油あぶ屋らの縁えんで、

こほりは
氷が張つて、

あぶらしよう
油一升こぼした。

あぶら
その油どうした。

たろう
太郎どんの犬と

じろう
次郎どんの犬と、

みんな嘗めてしまった。

いぬ
その犬どうした。

たいこ
太鼓に張つて、

はう
あつちの方でもどんだん

はう
こつちの方でもどんだん

(東京)

この「お月さまいくつ」の謡は、みなさんがよく御存じです。私たちも子供の時は、よく紅い円いお月様を拝みに出ては、いつも手拍子をうつては歌つたものでした。この童謡は国国で色々いろいと歌ひくづされてゐます。然し、みんなあの紅い円あかいつやつやしたお月様を、若い綺麗な小母さまだと思つてゐます。まつたくさう思へますものね。

お月さんつきほつち。

あなたはいくつ。

じふさんじふなななな十三七つ。

そりやまだ若いわかに。

べにかね
紅鉄漿つけて、

よめい
お嫁入りなされ。

(伊勢)

ののさまどつち。

いばらのかげで、

ねんねを抱^だいて、

はな
花つんでござれ。

(越後)

あとさんいくつ。

じふさんひと
十三一つ。

としわか
まだ年若いの。

こんどやうのほ
今度京へ上つて、

わらはかまお
藁の袴織つて着しよ。

(紀伊)

おつき
お月さんいくつ。

じふさんなな
十三七つ。

としわか
まだ年は若い。

ななをりき
七折着せて、

おんどきよへのぼしよ。

おんどきよの道で、

をとり
尾のない鳥と、

をとり
尾のある鳥と、

けいつちいや、あら、

きいようようと鳴ないたとき。

(伊勢)

「おんどきよへ」とは、

「今度京こんどきやうへ」といふのがなまつ

たのです。

お月つきさまいくつ。

十じふ三さん七ななつ。

そりやちと若わかいに。

お御みだう堂みづの水みづを、

どうぞと汲くもに。

(美濃)

お月さま。お年はいくつ。

じふさんなな
十三七つ。

お若いことや。

お馬に乗つて、

ジャンコジャンコとおいで。(尾張)

かういふ風に、「そりやまだ若いに。」と、みんな歌つてゐるから面白いのです。京へ上つたり、紅かねついたり、お嫁入りしたり、赤ん坊を生んだりしてゐます。お馬のジャンコジャンコもおもしろいでせう。それにまた、「そりやまだ若い。若船に乗つて、唐まで渡れ。」(紀伊)といふのもあります。それから少

し変つてゐるのに、一寸西洋の童謡見たやうなのがあります。
それは珍らしいものです。

お月様いくつ。

じふさんなな

十三七つ。

まだ年は若いど。

つきさま

お月様の後へ、

ち小いちやつけ和尚が、

すべりばし

滑橋をかけて、

つきさまをが

お月様拜むとて、

ずるずるすべつた。

(下総)

これは、空のけしきが其のままに歌はれてゐます。小さい和尚さんは白い星か薄い霧のやうな星の雲かでせう。滑橋もさうした雲のながれでせう。天の川のやうな。ずるずる滑るところをかかしいではありませんか。

それから、その綺麗な若いお月様の小母さまに、みんながお飯を見せびらかしたり、またいろんなものをせびつたりします。やはり子供の小母さまですから。

お月様。

くわんのんだうお
観音堂 下りて、

飯上まんあがれ。

飯まんまはいやいや。

あんもなら三つくりよ。

(信濃)

お月つきさま様。お月つきさま様。

赤あかい飯まんまいやいや。

白しろい飯まんまいやいや。

銭ぜに形がた金かね形がたついた

お守まもりくんさんしよ。

(岩代)

あとさん。なんまいだ。

ぜぜ一文おくれ。
あぶか油買つて進しんじよ。

(肥前)

•
 どうでやさん。どうでやさん。

あか赤い衣服下べんせ。

しろ白い衣服下べんせ。

(陸中)

そのお月様は、あか紅いのに桃色だと云つたとて、プリプリ怒つた
 のもあります。

お月つきさま様桃ももいろ色。

誰だれが云いつた。

海女あまが云いうた。

海女あまの口くちひきさけ。

(尾張)

それから、

大事だいじなお月つきさま、

雲くもめがかくす。

とても隠かくすなら、

金屏風きんびやうぶでかくせ。

(東京)

といふのがありませう。ほんとに金屏風でなくては、あの若い小母さまには似合はないでせうね。いかにも昔のお江戸の子供が謡つたやうでせう。氣象きしやうが大きくておほまかで、張はりがあつて、派出はでで。

「兎うさぎうさぎ」といふのも御存じでせうね。

兎うさぎ。うさぎ。

何なに見みて跳はねる。

十五じふご夜やお月つきさま

見みて跳はねる。ピョンく。

ほんとに、お月夜の兎のよろこびと云つたらありません。両耳を立てて、草の香の深い中から、ピヨン／＼と跳ねて飛んで出る、あの白い綿のやうな兎さんもかはいいものです。それにしても、あのまアるいお月さまの中には、いつも兎が杵きねをもつて餅を搗ついてゐる筈でしたね。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆58 月」作品社

1987（昭和62）年8月25日第1刷発行

底本の親本：「北原白秋全集 第一六卷」岩波書店

1985（昭和60）年6月

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

お月さまいくつ

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>